



TITLE:

書評 セオドア・サイダー 著, 中山康雄 監訳, 小山虎, 斎藤暢人, 鈴木生郎 訳, 『四次元主義の哲学--持続と時間の存在論』 (春秋社, 2007, ix+437p.)

AUTHOR(S):

坂井, 賢太朗

CITATION:

坂井, 賢太朗: 書評 セオドア・サイダー 著, 中山康雄 監訳, 小山虎, 斎藤暢人, 鈴木生郎 訳, 『四次元主義の哲学--持続と時間の存在論』 (春秋社, 2007, ix+437p.). 哲学論叢 2010, 37(別冊): S179-S182

ISSUE DATE:

2010

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/128961>

RIGHT:

書評

セオドア・サイダー著, 中山康雄 監
訳, 小山虎, 斎藤暢人, 鈴木生郎 訳,
『四次元主義の哲学 持続と時間
の存在論』(春秋社, 2007, +437p.)
坂井賢太郎

本書は *Four-Dimensionalism: An Ontology of Persistence and Time* (Oxford University Press 2001) の邦訳である。著者のセオドア・サイダーは現代形而上学において注目される若き俊英であり、原著でアメリカ哲学学会賞を受賞している。また、本書はそれ自身の哲学的価値に加え、あとがきで述べられているように、日本語で書かれた分析形而上学の中級の入門書として読むことができる。

本書の目的は四次元主義 (four-dimensionalism) を擁護することである。四次元主義とは対象は空間的部分だけではなく時間的部分 (temporal part) を持つという立場である。著者は時間的部分について厳密な規定を行い、自身の立ち位置を明確にした上で対立する立場と比較考量を行い、自身の立場が最も有望な理論であることを示そうとする。

本書の構造はこうである。序論で、方法論についての考察が行われ、第1章では四次元主義的な世界像の概観が説明される。そして、第2章より順次、対立する立場に批判が加えられる。第2章では本書で前提

される時間と時制の理論 (永久主義+時制の還元主義) の説明と対立する現在主義への批判が行われる。第3章では、四次元主義の「時間的部分」の概念を厳密に規定する。加えて、三次元主義が自身に明確な規定を与えられていないことも示す。第4章では、厳密な規定より時間的部分が存在することを擁護し、第5章では著者の擁護する「四次元主義の段階説」が明確化される。最後の第6章では、その「四次元主義の段階説」に対し加えられている反論のなかで、筆者が十分な回答を与えられていないと考えている反論に返答を試みる。

本稿では私が本書の議論の主要な部分だと思ふところの第1章の四次元主義の概説、第3章の時間的部分の規定、第4章の時間的部分の存在の擁護を中心に本書を紹介したい。

第1章では四次元主義の実在像の概説が行われる。四次元主義者は、対象を時間的・空間的広がりをもったものとして見る。

ここで、時間は空間と類比的にとらえられる。すなわち、時間を通して持続するもの、例えば人が、空間的な広がりを持っており、さらに鼻や口などの部分を持っていることに異論の余地はない。同様に、人が子供時代、青年時代などの時間的部分を持っていることも認められるだろう。ここから、その人の時間的部分の総和としてその人が時間的な広がりを持っているということが考えられる。

この四次元主義的な見方に対立するのは

三次元主義的である。四次元主義は対象が時間を通じて持続する、すなわち「継続する (perdure)」ものとしてとらえるが、三次元主義は対象をそれが存在するいかなる時点においても「余すところなく現れている (wholly present)」もの、すなわち「耐続する (endure)」ものとしてとらえる。ここでの対立点は継続と耐続という存在の仕方のいずれが正しいかであり、対象が時間的な広がりを持つか否かである。

四次元主義が時間的な広がりを持つことを支持するのはその方がある問題によりよく答えられるからである。その問題の一つは時間を通じた変化における対象の同一性の問題である。同一性の基準をライプニッツの「不可識別者同一の原理」

(L) $x=y$ ならば x と y はまったく同じ性質を持つ

で考えると三次元主義では変化の前後において対象が持続することの説明が困難となる。例えば、散髪前の私を「ロング」とし、散髪後の私を「ショート」とする。(L)の対偶は「 x と y が一つでも違う性質を持つならば $x \neq y$ 」なので、三次元主義では少なくとも髪型について私は散髪前後で同じ性質を持つとはいえないので「ロング」「ショート」となり、両者の間に同一性は成り立たない。これに対し四次元主義の提出する解決法は「ロング」と「ショート」はそれぞれ私の時間的部分であるという方法である。すなわち、「ロング」と「ショート」は私のそれぞれの時点における時間的部分

であるが、私はそのいずれとも同一ではなく、その両方からなる時間的部分の和である。そのため、変化の前後いずれにおいても私は同一であると言える。

第3章では対象が時間的な部分を持つという四次元主義の主張が定義される。時間的部分であるとは、ある時点においてある対象 x がある対象 y の瞬間的な時間的部分であると定義される。そして、「瞬間的な時間的部分」の定義は

「 x が瞬間 t における y の瞬間的な時間的部分である_{def} (1) x は t においてのみ存在し、(2) x は t において y の部分であり、(3) x は、 t において y の部分であるいかなる対象とも、 t において重なりあっている」(p.117)

となる。時間的部分であるかはともかく瞬間的な対象が存在しうことは三次元主義の見解とは矛盾しない。

例えば、多くの三次元主義者は、ある粘土の塊が一定期間像の形になり、その後つぶされたとすると像はその一定期間存在していたというだろう。そうすると、この粘土が一瞬像になり次の瞬間につぶされた場合も像は存在していたというだろう。それでは、三次元主義者がいう「余すところなく現れている」ところの像と粘土の塊は通時的に同一であると言えるのであろうか。

一般的に考えると、粘土の塊が瞬間的に像になり、また粘土の塊に戻るとする先の例では、この粘土の塊と像とは同一であると思われる。しかし、第1章の紹介でも触

れたように、それぞれがどのような意味で「余すところなく現れていて」かつ通時的に同一であるかについて（少なくとも（L）では）三次元主義は明確な説明を与えない。これに対し四次元主義はある時点における対象は瞬間的な時間的部分であり、対象はその総和と見ることにより、通時的な同一性に説明を与えられるのである。

第4章は9つの節から成るが、全てを紹介することはできないので、著者自身が最も強力な議論とみなしている第9節を紹介する。第9節では「論理から曖昧性が生じることはない」という仮定を受け入れる人であれば誰であれ四次元主義を受け容れなければならないということが示される。先取りして概要を述べると瞬間的な時間的部分に必然的に構成が起こることを保証することで、対象が時間的部分を持つことを示すのである。

対象、例えば人、が存在するのは小さな物質片が適切な仕方で配列されたときであり、適切な仕方で配列されなくなると存在しなくなるとする。このとき、ある人を構成する物質片が非常にわずかに異なった仕方で配列されたとき、その人は存在するといえるだろう。ここで、どこでその人は存在しなくなるのだろうか。この問題に対し筆者はデイビッド・ルイスを援用しながら次のように答える。

物質片が配列されることを「構成」と呼び、その結果生まれたものを「融合体」と呼ぶとする。

もし、ある物質片からなるクラスが融合体を持つのでないならば「構成に関する制限」がなければならない。ここで事例 C_1 は私の身体の部分である物質片からなるクラスを含んだ事例であるとする。事例 C_2 は私の死後、私を構成していた物質片が天の川全域に渡って散在した状況である。次に C_1 と C_2 を結び事例からなる有限の系列を考える。このとき、 C_1 においては先のクラスに私の身体部分の構成が確定的に生じ、 C_2 においては構成が生じないと考えると先に考えた連続的な有限の系列の中で一方では構成が生じ、他方で構成が生じない互いに隣接する事例があるはずである。先のケースにあてはめると、存在する人が非常にわずかに物質片の配列を変えただけで存在しなくなってしまうということである。このような「明確な切れ目」は恣意的であり、考えられないので「構成に関する制限」は存在しないと筆者は論じる。すなわち、構成は常に生じるのである。

ここで注意しないといけないのはクラスとクラスの記述は異なるということである。すなわち、ある分子のクラスが人というクラスを一意的に指示することに失敗するのは、人という語が曖昧であるからである。

では曖昧性を持たない語と真理関数的結合子で構成の問題を考えてみよう。

融合体は以下のように定式化する。

- (F) ある対象 x が存在し (1) クラス C のいかなる要素も x の部分であり (2) x のいかなる部分も C の

何らかの要素とある部分を共有している。

このとき、あるクラス C が融合体を持つことが曖昧でありうるのはそのクラスの要素に融合体を作る構成が起こるかどうかの曖昧であるか、 (F) に含まれる語が意味論的な非決定性がある場合のみである。

前者は先の例より否定された。また、後者は (F) に含まれているいかなる語も曖昧でない論理的な語彙であるため「論理から曖昧性が生じない」という仮定を受けられるならば、否定される。以上よりすべてのクラスは融合体を持つのである。

四次元主義を擁護する時間的部分の議論に移ろう。あるクラスがある時点において融合体を持つとする。このとき、一つあるいは複数の時点を引数に取り、値としてそれらの時点において存在する物質片からなる空でないクラスを割り当てる関数 f を考える。このとき、 x がある割り当て f の通時的融合体(以下 D 融合体)であるのは f の定義域に含まれる任意の時点 t において x が t において $f(t)$ が持つ融合体であるときかつそのときに限る。このとき、ある時点のみに存在する D 融合体を最小 D 融合体と呼ぶとすると、構成に関する制限はないので

(U) いかなる割り当ても最小 D 融合体を持つ。

が導かれる。そして、この (U) は第 3 章で示された時間的部分の定義を満たす対象が存在することを保証する。を要約すると A を定義域に t のみを含みクラス $\{x\}$ を割り

当てる割り当てとすると A は最小 D 融合体 (z とする) を持つ。すなわち

- (1) z は $\{x\}$ の融合体であるため t において z は x の部分である。
- (2) z は最小 D 融合体であるため t においてのみ存在する
- (3) (1) より z は t において x の部分であるいかなる対象とも重なりあっている。

すなわち、 z が x の先の瞬間的な時間的部分であること (1) ~ (3) を満たすことが示されるのである。ここから時間的部分の存在が示され、「対象は時間的部分を持つ」という四次元主義の主張が示される。

最後に、本稿では紙幅の関係から四次元主義の擁護までは紹介できたが、筆者の主張のもう一方の「段階説」までは紹介できなかった。「段階説」の議論も興味深いので是非、本書を読んで確認していただきたい。

その他にも本書は時空ワーム、メレオロジ的和、トロープ、対応者理論など幅広く現代の分析形而上学の主要な概念を扱っている。分析形而上学は新しい分野であるためか日本語の解説書が充実しておらず、初学者でも原典から入らないといけなことがしばしばである。そのような中で本書は主要概念ごとに丁寧に説明と例が書かれ、訳者による用語解説も付いているのでしっかりと読んでいけば理解しやすい本である。その点で本書は、分析形而上学を学ぶ手引きとしては最適の本ではないかと私は思う。